

検査者の被験者におよぼす影響について*

—検査をくりかえした場合の変化—

東 北 大 学

佐 藤 健**

I 問 題

最近心理学に関する方法論研究の一つに、検査・質問紙調査・面接法およびある種の実験における結果に影響をおよぼす要因として、実験者（あるいは実施者）と被験者との心的関係としての rapport がとりあげられている。あるいは直接 rapport を問題にしないにせよ、実験者の被験者に対する影響性について、又検査課題や質問内容等に対する被験者の心的構えによる測定結果のゆがみについていくつかの研究がなされている。これらはもちろん測定結果に含まれる被験者の応答の心的機制的分析をめざすものであろうが、直接には測定結果についていろいろ考察を試みる前に意図した測定対象が妥当に把握されているか否かを明白にすべきであるとする立場にたつものであり、根本的には心理的場の理論にもとづく仮説から出発し、現象のとりかたから対人関係 interpersonal relation, 暗示 suggestion, 社会的影響 social influence の問題として、あるいは言語の意味論的問題としてとりあつかわれている。しかし研究の手続きは研究者によつて、異なっており、結果もかならずしも一致しているわけではなく、まだ研究仮説として明確に認められているものはみられないといつてよい。これは前述のように研究者によつてとりあげられる問題が一定の領域にあるわけでもなく、手続きの相違も一因となつているものであろうが、この問題が単純に解決できるものではないことを示しているところであり、どのような形に研究がまとめられるかの予見をもつことは困難なところであらう。

さて現在までの諸研究についてみると、Wickes(18)は実験者のちよつとした動作や口ぶりが検査結果に影響するとし、Bernstein(1)は、TATを用いて、口答と筆答の

2つの応答方式と、実験者が被験者の眼前にいた場合とそうでない場合の2条件をかみあわせ実験し、応答方式間には相違はみられないにせよ、実験者の存在が結果の情緒的な要因に抑止的な影響をもつことを示した。実験者の被験者に対する相対的地位が問題であるということは、Thibaut と Riecken の研究(17)が示しており、また声の質も聞き手の情緒に関係がないわけではないとする Diehl(3)の研究もみられる。Cole(2), Sacks(9), Gibby(5) Gibby ら(6, 7), およびわが国の続ら(14, 15, 16)の諸研究では、実験者と被験者との心理的關係としての rapport が test 結果に重大な影響をあたえることを実証しており、続らは検査を受けるにあつての被験者の実験者に対する好嫌の態度が rapport 形成に、ひいては検査結果におよぼす影響因であるとしている。しかしまた Gibby らは臨床上、検査の実施条件に対して反作用をもつのは、被験者が病的である場合には病的傾向のいかんによるという結果を示しており(8), Diamond(4)の研究では、普通人と分裂病患者を被験者とし自己の反応の修正能力を比較しているが、この結果では、精神分裂症患者は強い固執傾向を示し、external な frame of reference の利用に欠陥がみられるとしている。これからすると被験者の質も重要な要因と考えられるわけである。さらに塚田の調査研究(12)によれば人格目録法における自己診断では目録にもられる項目によつては、回答者の一方的判断が多く、診断面での回答者の心的機制的洞察が要求されてくると論じ、続(13)は、質問紙法における用語の重要性を説いており、調査や測定の結果におよぼす影響因の多種なることを認識させられる。

ここで少し見方をかえ諸研究に用いられている検査をみると、Rorschach test, TAT 等の投影法と知能検査が主であり、それほど多種類にわたるものではないが、おのおの応答の際の心的メカニズムは少なくとも同様であるとはいえず、検査によつては、被験者の構えが問題になることであり諸研究の結果を直接比較していくには、少なからぬ抵抗を感じさせるものである。もちろん

* Examiner's influence to subjects in a test situation. —On influence observed through the change resulted from repeated testing—

** by Sato, Takeshi (Tohoku University)

同じ検査を用いた研究も見られ、研究意図、問題領域もほとんど同様の場合もあるにしても、被験者の質的条件や実施者の質的相違の吟味、手続きについての異同等の検討の有無が分析や対照に不可欠のものと思われるが、この点現在研究の数は少なく、検査に関する実施者と被験者との人間関係の問題は今後に期待すべきものがあると思う。

本研究においては、いわゆる練習効果や学習効果、記憶による成績の変化などを含まずに、被験者と実験者との心理的關係と、検査に対する体験とが検査結果におよぼす影響を追究することを目的とするものである。それについては今までの研究にみられるところの実験者の personality が検査結果に影響をもつという仮説を肯定するものであるが、さらにその影響性が時間的経過にしたがって変化してゆくのではないか、いいかえれば被験者のもつ先行経験が次の事態に第二次的になんらかの影響をあたえるのではないかということを予想するものである。これは統制の研究からも十分予期されるところであつて、かなり常識的なものであろうが、抑止的影響について実証的検討を求めることは、価値のないことではないと思われる。というのは時間的経過にともなつて抑止の影響がうすれてゆくことが考えられ、検査における抑止的条件の統制についてひとつの知見を提供すると考えられるからである。いわゆる familiarity や「なれ」が、抑止効果に対して、どのような作用を有するものかを明確にすることは、検査における実施者と被験者の人間関係を問題とすると、当然とりあげられるべき研究目標となりうるものである。

本研究の目標は、教師と教師以外の人、つまり外来者によつて検査がされる場合（教師事態と外来者事態）の結果の相違と、教師検査事態と外来者検査事態とのおのおのが先行して経験された場合、それが次の検査事態にどのような影響をあたえるものであるかを中学校生徒についてみようとするにある。検査実施者の personal な条件に比較して、学校生徒においては教師という位置 status の条件が優先的であると思われ、また教師による測定結果の分析は、教育的診断上十分に問題とすべき価値を有するものと考えられるからである。

II 方法および手続き

一般に検査法は、能力、知識、技能、その他の心的機能の状況を明らかにすることを目的とする心理学的測定法であるが、測定対象の精神機能が、理論的には明確であるとしても操作的面つまり検査の構成からすれば、検査の構成と対象精神機能の構造とが完全に対応するとは

考えられない。本研究における問題の解明にあたつては、検査の測定しようとする精神機能はともかくとして検査が測定している精神機能についてはあらかじめ十分な知見をもつことが必要であらうが、これにしても、仮説検証の操作手続きのくりかえしによつて順次精度を増していくものである。ここで、いわゆる Hartshorne らの「正直性検査」にもとづく虚偽検査⁽¹⁰⁾を用いる大きな理由は、この検査の測定しようとするものは虚偽行為であつて、その虚偽行為は、練習効果、学習効果、記憶といった効果性は考えられず、その時の条件が生起に大きく影響するものだからである。虚偽の心的機制についての説明や実験も多くみられるが、この検査でみられる虚偽は、得点への要求、不正行為に対するがめ、不正が発見される可能性、発見された場合の罰への恐れ、といった諸因が、力動的に関係しあつて生じるものであろうし、検査事態の影響が直接的なものと思われるのである。

1 検査：Hartshorne らのいわゆる正直性検査にもとづくもの

正直性検査は Hartshorne らが児童・生徒の虚偽行為を実験的に研究する目的で考察したものであるが、一応ここで、その概略をのべる。

この検査は、みかけは普通の算数の試験であるが、検査の解答を被験者に気づかれないようにうつしとり、その後被験者自身に自己の成績を採点させる。この採点にあたつて、不正が行なわれれば、それは前にうつしとつた解答と対照することにより知られるというわけである。

本研究で実際に使用した検査は、小学校4年3学期で正答率50%程度の算数四則計算20題からなり、被験者にとつては、みかけ上はきわめて容易な課題とし、時間制限（time limit）で、通過率30~40%程度の成績におさえ、得点要求を強めるよう配慮した。検査は教室で実施し、いつたん集め別室で10~15分ほどで被験者ひとりひとりの解答を忠実に別紙にうつしとる。この間、被験者には別の作業（中間作業とよぶことにする）を実施している。中間作業は30分以上の時間をかけ、実験の意図を察せられないよう注意する。中間作業を終了後、解答を再配布し自己採点させるわけである。

intrusion はこの検査では、非常に重要であるが、虚偽の生起をできるだけ抑制しないよう留意すべきであり、「これから、大学の研究のための数学の実力テストを実施します。これは、学校の成績とは関係ありませんが、皆さんは多くの中学生の中から代表として選ばれたのですから、一生懸命やつてください。できるだけ早く

正確にやることが大切です」と述べることにした。自己採点についての instruction は、次のとおりである。「非常に多くの生徒にテストしておりますので、忙しくて困っております。ですから自分のテストを自分で採点してもらいます。黒板に正答を書きますから、それを見て、正直に採点してください」特に不正を禁ずることを強調はしないが、教室が騒がしくなつたときには、正直にすることというのをいう程度のことを認めた。

2 被験者： 仙台市内2校、塩釜市2校、各市立中学校生徒第1学年男女。人数については、後述の実験計画の項の被験者構成を参照のこと。

3 検査実施者(以下検査者という)： 問題によりまた仮説により検査者の決定には、いろいろと論すべきものがあり、その選定には慎重を要するが、本研究では前にも述べたとおり次の2者である。

- 1) 被験者担任の教師——これは被験者と日ごろ接触の回数も多く、被験者の態度は十分確固たるものがあると想定される。

「教師」つまり先生というものの、観念には、被験者のような中学1年生では、尊敬すべき人、こわい人といった色彩がかなり強く含まれており(11)、ここで用いられる検査では、非常に抑止的影響性が強いものと考えられる。

- 2) 外来者(検査時にはじめて接し、学校外の人)——担任教師に対して、検査のときにはじめて会う人であり、その人に対しては、検査前に紹介されただけの知識しかなく、被験者との縁のうすい人であつて検査に対しては抑止影響はほとんどないと考えられる。この場合は大学院および学部学生。

この者については、前述のように、学校生徒を被験者を選ぶことからなるべく検査者の個人的見かけの影響を除き教師という status の影響を強く前面に押し出そうと望んで選んでいるわけであり、被験者を中学1年に限つたのは、検査における虚偽測定意図を察知されないようにするためと、あまり低学年の児童では、検査成績に対する要求も弱いと思われるからである。

4 実験場所および日時： 実験場所は各被験者が在学校のホーム・ルームである。1クラス単位で実施した。

実施時期は、昭和30年9月～11月および昭和32年5月～9である。

実験計画

以上の検査、検査者、被験者について、次の Table 1 に示した実験配列を計画した。第1回検査と第2回検査との間隔は、各群とも7日である。被験者には第1回目、第2回のあることは話さない。第2回目の検査問題

Table 1

被験者群	実施順序	
	第1回	第2回
A 群	教師実施	外来者実施
B 群	外来者実施	教師実施
C 群	教師実施	教師実施
D 群	外来者実施	外来者実施

は、第1回目と困難度、型式は等しくするようにつとめたが配列はちがえてある。

実験計画にもとづく被験者構成については Table 2 にみられるとおりである。

Table 2

被験者群	学 校	人 数			
		男 子		女 子	
		第1回	第2回	第1回	第2回
A 群	仙台A中	31名	31名	23名	24名
	塩釜N中	50	50	48	44
	塩釜S中	27	25	26	26
B 群	仙台A中	30	31	21	22
	塩釜N中	48	50	49	41
	塩釜S中	26	29	26	26
C 群	仙台N中	58	55	52	51
	塩釜N中	53	52	49	45
	塩釜S中	45	44	48	49
D 群	仙台N中	57	54	55	55
	塩釜N中	53	52	48	49
	塩釜S中	46	46	47	47

中間作業としては①内田・クレペリン精神作業検査、②ソシオメトリック・テストなどを行なつた。

III 結果および考察

資料として得られるものは、①虚偽者数、②虚偽回数、虚偽答数および虚偽答種類である。なお間接的資料として担任教師の日常観察記録による生徒の非行事故報告、中間作業としての諸検査結果があげられる。これらの資料の意味するところはそれぞれ異なるものであろうし、結果の整理記述にあたって、まずもつて一応その意味を考えてみる必要がある。検査以外の間接的資料としてあげたものは、それ自体研究の本題のために得ようとしたものでもなく、ここでは問題に対するいわば傍証的地位にある。中間作業において得られた結果は、ここでは記述を省略することにする。

Table 3 a 男子虚偽者

被験者群	学 校	第1回 test		第2回 test	
		名	%	名	%
A 群	仙台A中	2	6.45	11	35.39
	塩釜N中	8	16.00	17	48.00
	塩釜S中	10	37.04	24	68.00
B 群	仙台A中	12	40.00	14	45.16
	塩釜N中	11	22.92	14	40.00
	塩釜S中	7	26.92	20	48.28
C 群	仙台N中	8	13.79	6	10.91
	塩釜N中	16	30.19	15	28.85
	塩釜S中	9	20.00	8	18.18
D 群	仙台N中	15	26.32	19	35.19
	塩釜N中	24	45.29	18	34.62
	塩釜S中	12	26.09	11	23.91

結果1：虚偽の生起について

実験配列 Table 2 に対応した虚偽者数、および虚偽生起率つまり被験者に対する虚偽者数の百分比を示すと Table 3 a, b のようになる。

虚偽生起率からすると、一応男子と女子では、それぞれ異なつた傾向を有しているとみられる。おのおのの生起率がなんらかの必然的意味をもつものとすれば、男女共通の現象を追うよりも、第1に性別にみていくことが当を得ていると考えられる。

1 男子被験者の虚偽生起について

a 第1回検査における教師事態と外来者事態との

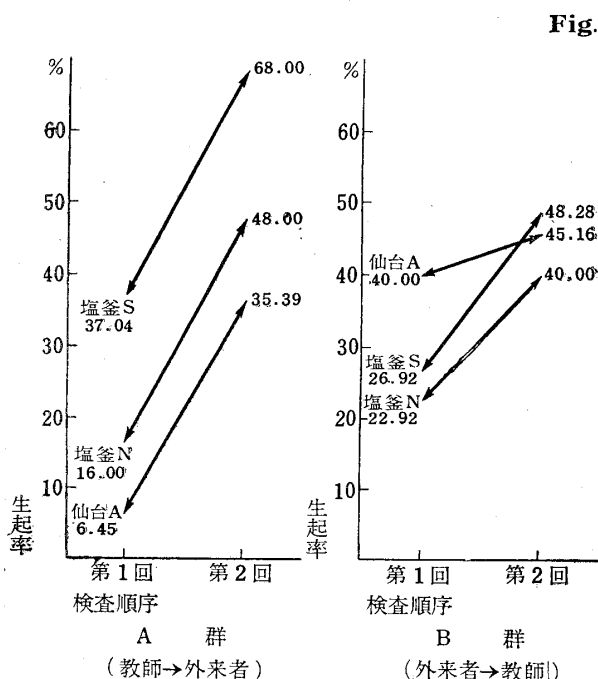


Table 3 b 女子虚偽者

被験者群	学 校	第1回 Test		第2回 Test	
		名	%	名	%
A 群	仙台A中	2	8.70	6	25.00
	塩釜N中	10	20.83	21	47.73
	塩釜S中	14	53.85	10	38.46
B 群	仙台A中	3	14.29	9	40.91
	塩釜N中	7	14.29	16	39.02
	塩釜S中	6	23.08	13	50.00
C 群	仙台N中	7	13.46	9	17.65
	塩釜N中	11	22.45	12	25.53
	塩釜S中	7	14.58	9	18.37
D 群	仙台N中	4	7.27	11	20.00
	塩釜N中	10	20.84	12	24.49
	塩釜S中	8	17.02	11	23.40

比較

虚偽者生起率を図式化して示した Fig. 1 からみてとれるように、A・C群の第1回検査（教師事態）とB・D群の第1回検査（外来者事態）とでは、一般に教師事態の方が生起率は低い。

これを統計的分析によつて生起率の差を検討するため χ^2 検定によることにする。

検定の結果からすれば危険率は1%以下で有意な差がみられるわけである。

これは本研究における仮説を支持する現象と思われ、実施者の影響であるとするれば、前掲の諸研究の示す結果

Fig. 1

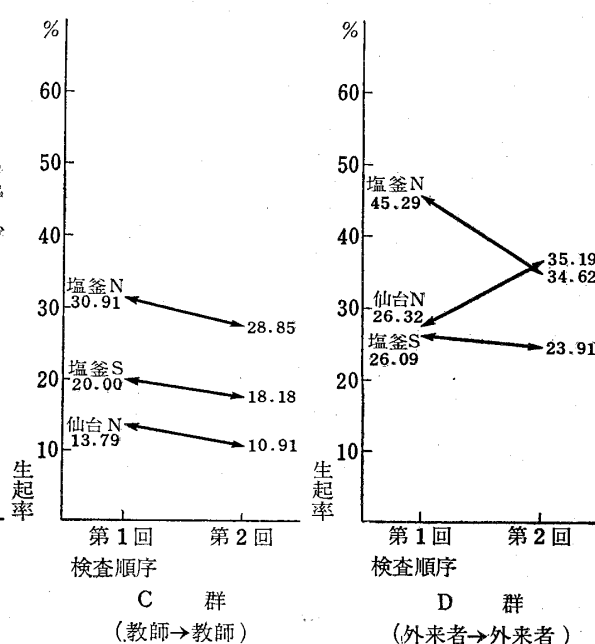


Table 4 第1検査における教師事態と外来者事態の生虚率の差の検定

	教師群* (A・C)	外来者群* (B・D)	計
虚偽者計	53	81	134
正行為者計	216	179	395
計	269	260	529

$$\chi^2_0 = 9.0 \quad df=1, \chi^2_{0.01} = 6.64 \quad \therefore P < 0.01$$

と同様な結果であるといえるものである。教師のもつ心的圧は、外来者のそれよりも虚偽の生起に、より抑止的影響性をもつものであると考えられよう。

b 第2回検査における教師事態と、外来者事態との比較

次に第2回検査における教師事態と外来者事態を比較するわけであるが、まず生起率を図式化した Fig. 1 からして、同じ教師事態にしても、先行する検査の検査者によつて、ことなつた現象が生じているようにみうけられる。つまり第1回検査が外来者事態であるB群では、第2回検査教師事態の虚偽生起率は決して低いものとはいえない。むしろ外来者事態に比べても高いくらいである。これに対してC群（第1回も教師事態）の方は、第1回よりも低くなる傾向を示している。

外来者事態についても同様であり、第1回は教師事態であるA群では各校ともに一斉に高い生起率を示しているが、第1回も外来者事態であるD群は、2校は低下、1校は上昇という結果である。

これらについて統計的検討を χ^2 検定によつて試みると、まず第2回検査における教師事態の虚偽生起率の、第1回検査の検査者別による差は、危険率1%以下で有意であることが知られる。

Table 5 B群とC群における第2回検査、教師事態の生起率の差の検定

	B 群	C 群	計
虚偽者計	48	29	77
正直者計	110	151	261
計	158	180	338

$$\chi^2_0 = 9.52 \quad df=1, \chi^2_{0.01} = 6.64 \quad \therefore P < 0.01$$

すなわち第1回検査が、外来者によつて実施されている場合には、次の検査が教師によつて実施されるとしても虚偽の生起は多く、第1回検査も教師である場合は減

* 教師群としてA, C群を、外来者群としてB, D群をおのおのあわせて検定にかけたのは、ともに第1回検査時における条件に着目してのことである。

少するといえるのであつて、検査者の test 結果におよぼす影響は時間的に変容することを示している。

さらに論を進めてみると、検査に対する態度は、検査実施者に対する被験者の熟知度と検査自体に対する解釈および作業成績への要求の力動的関係において生ずるものと考えられる。そして、この場合、検査に対して処女体験時には検査者に対する熟慮度は、力の強い因子であると推測されるわけであるから、先行体験をもつ場合には、同一検査者が再度実施するのと、ことなつた検査者であるのでは、検査に対する解釈つまり検査施行意図に対する洞察が、ちがつてくるものと思われる。とすればD群（第1回、第2回ともに外来者事態）の第2回検査の結果に、学校差がみられたことは、結局、検査者に対する熟知度が低いためのものであるということになるが、検査施行意図に対する洞察の相違とともに検査者の個人的ないわゆる見かけの personality からする影響が大きな要因であることは、十分予想できるところである。

2 女子被験者の虚偽生起について

a 第1回検査における教師事態と外来者事態との比較

男子の場合と同じく、虚偽者生起率を図式化してみると Fig. 2 のようになる。第1回検査における教師事態（A, C群）と外来者事態（B, D群）の生起率を比較してみると、数値上 χ^2 検査検定によれば有意な差があるとはいえない。

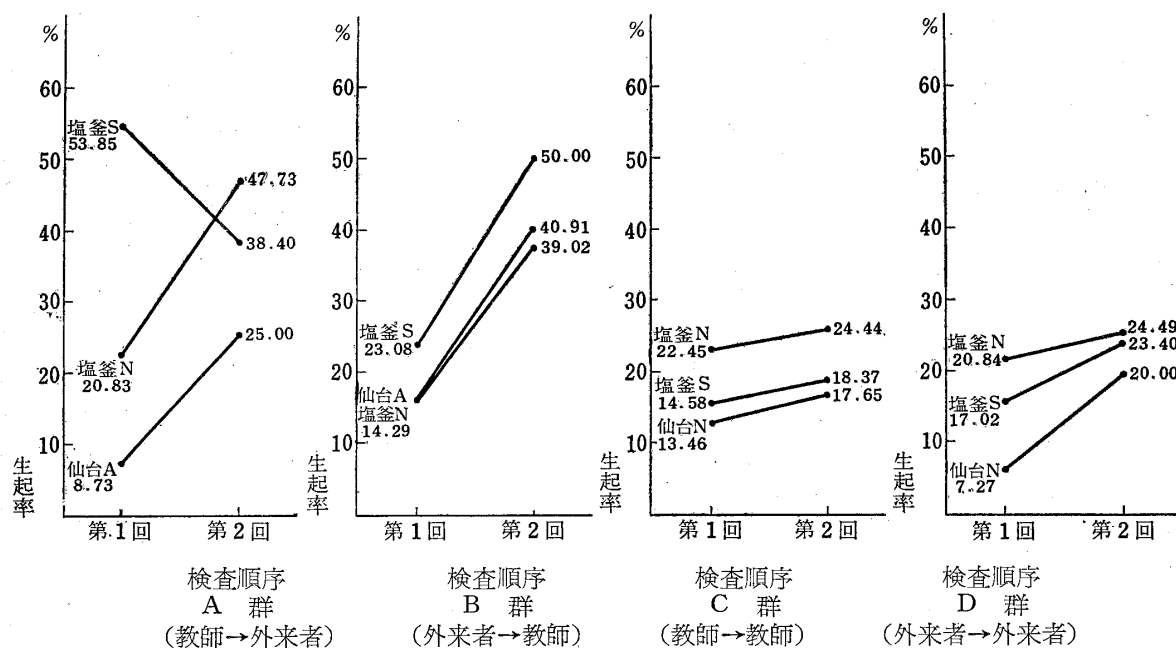
Table 6 第1回検査における教師事態と外来者事態の生起率の差の検定

	教師事態 (A・C)	外来者事態 (B・D)	計
虚偽者計	51	38	89
正直者計	195	205	400
計	246	243	489

$$\chi^2_0 = 1.635 \quad df=1 \quad 0.30 > P > 0.20$$

しかしながら有意な差がないとはいえるものの、A群においては生起率にかなりの学校差がみられ、教師の影響は男子の場合とかなり異なつたものと思われる。塩釜S中学校が、A群では53.85%, C群では14.58%でかなりのひらきがあるが、同一学校であつても担任教師に対する態度は、女子生徒ではかなり異なることがあると思われる。この点については、ここで得られた資料からは深い考察は不可能であるが、全体としては男子被験者と女子被験者では、第1回検査時における検査実施者の影響がかなり異なるものであることは確かであるといえよう。

Fig. 2



b 第2回検査における教師事態と外来者事態との比較

第2回検査における教師・外来者の2事態の生起率についてはだいたい男子と同様な傾向がみられる。すなわち同じ第2回検査の教師事態であつても、先行する第1回検査が外来者事態であれば生起率は高く、第2回も教師事態であれば生起率は低い。また外来者事態についても、第1回、第2回と外来者事態が続くと生起率は低くなっている。

Table 7 B群とC群における第2回検査教師事態の生起率の差の検定

	B 群	C 群	計
虚偽者計	38	30	68
正直者計	51	115	166
計	89	145	234

$$\chi^2_0 = 13.455 \quad df=1, \chi^2_{0.01} = 6.635 \quad \therefore P < 0.01$$

Table 8 A群とD群における第2回検査外来者事態の生起率の差の検定

	A 群	D 群	計
虚偽者計	37	34	71
正直者計	57	117	174
計	94	151	245

$$\chi^2_0 = 8.127 \quad df=1, \chi^2_{0.01} = 6.635 \quad \therefore P < 0.01$$

χ^2 検定によれば、教師、外来者事態ともに先行検査

者によつて結果が異なるということは統計的に認められる。しかし男子の場合はD群でかなりの学校差をみせていたが、女子では各校とも同じ程度の生起率で同様な傾向をみせており、外来者の影響は男子と異なりかなり強いもののように思われる。前述の教師事態とあわせ考えると、被験者の性差は虚偽測定検査では検査者の条件とともに十分考慮すべき問題であろう。

結果2：虚偽答について

検査は前述のとおり算数四則計算問題の形に構成されており20題からなっている。この20題は宮城県教育研究所作成の宮城県学力標準検査の小学校4年終了程度の算数検査の問題から通過率45～55%のものを参考にし予備検査を終て作成したものであるが、検査はいわゆる時間制限法によつて実施されたので、応答の中には未完成で途中で中止したものが含まれてくる。したがつて虚偽答の種類もこの未完成答を完成させたものや全然手をつけなかつたものを書きたしたもの、および誤答を訂正したものの3種類がみられるのであるが、虚偽答数をみると、1人あたりの平均数の表 (Table 9) から知られるように数は少なく、したがつて虚偽答種類についての分析は一応省略することにし、多数虚偽答数について結果を記述、考察を試みることにする。

虚偽者1人あたりの平均虚偽答数 (M) および標準偏差 σ を実験配列に対応させて示すと Table 9 a, b のとおりである。

Fig. 3 は Table 9 の数値によつて虚偽差平均数を図

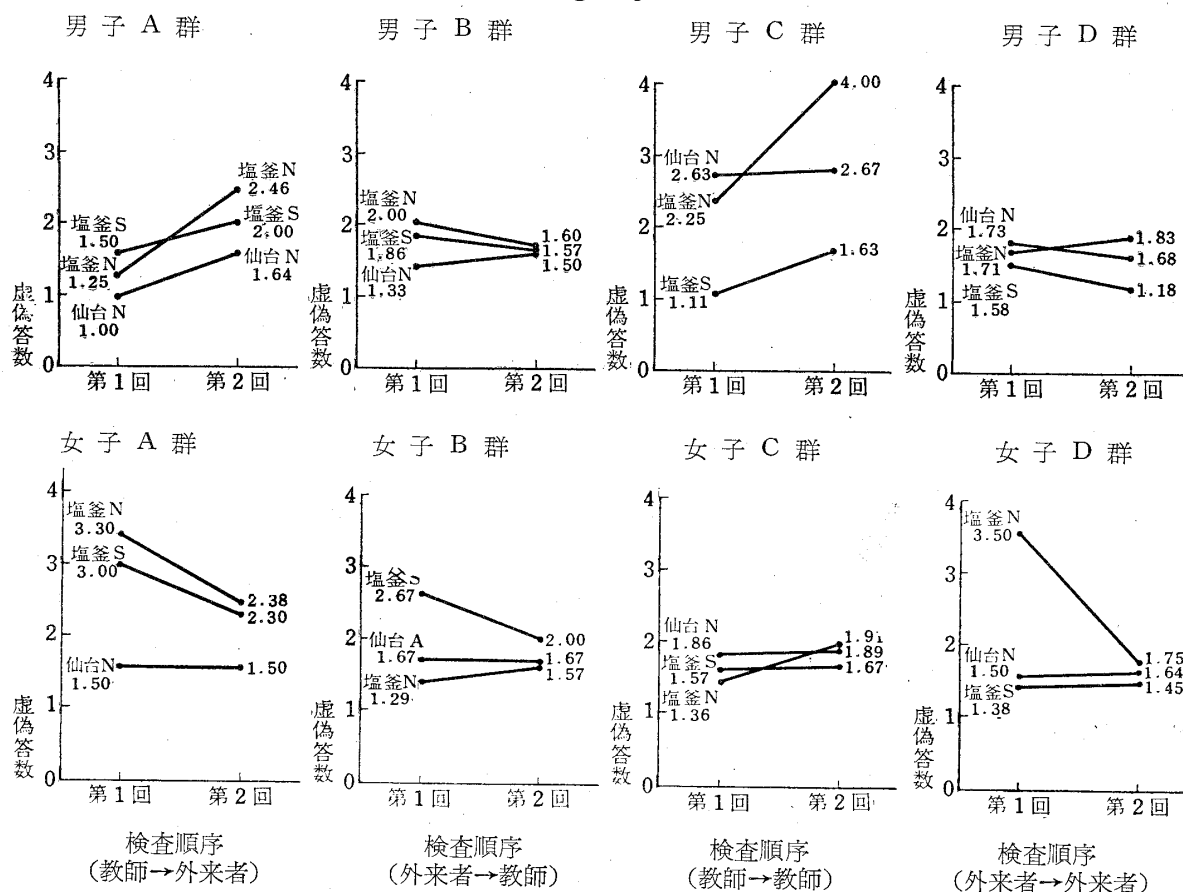
Table 9 a 虚偽答数 (男子虚偽者)

被験者群	学 校	第1回 Test		第2回 Test	
		M	σ	M	σ
A 群	仙台A中	1.00	0.00	1.64	0.69
	塩釜N中	1.25	0.42	2.46	1.32
	塩釜S中	1.50	0.60	2.00	1.12
B 群	仙台A中	1.33	0.67	1.50	0.71
	塩釜N中	2.00	0.82	1.60	0.84
	塩釜S中	1.86	0.73	1.57	0.57
C 群	仙台N中	2.63	1.91	2.67	1.33
	塩釜N中	2.25	0.97	4.00	4.13
	塩釜S中	1.11	0.37	1.63	0.69
D 群	仙台N中	1.73	0.89	1.68	0.88
	塩釜N中	1.71	0.77	1.83	1.10
	塩釜S中	1.58	0.87	1.18	0.30

Table 9 b 虚偽答数 (女子虚偽者)

被験者群	学 校	第1回 Test		第2回 Test	
		M	σ	M	σ
A 群	仙台A中	1.50	0.50	1.50	0.50
	塩釜N中	3.30	2.85	2.38	1.26
	塩釜S中	3.00	2.31	2.30	1.42
B 群	仙台A中	1.67	0.89	1.67	1.04
	塩釜N中	1.29	0.49	1.57	0.75
	塩釜S中	2.67	2.45	2.00	1.15
C 群	仙台N中	1.86	1.47	1.89	0.99
	塩釜N中	1.36	0.53	1.91	0.72
	塩釜S中	1.57	0.82	1.67	0.24
D 群	仙台N中	1.50	0.50	1.64	0.81
	塩釜N中	3.50	1.90	1.75	0.79
	塩釜S中	1.38	0.59	1.45	0.49

Fig. 3



式化して示したものである。

1) 男子被験者の虚偽答数について

Fig. 3 からすると、C群をのぞいてはだいたい平均虚偽答数には、大きな差はみられない。C群では第1回、第2回ともに学校差が大きく、1校を除いては比較的虚

偽答数は多いようである。

一応第1回教師事態について、群と群の場合の統計的検定*を試みることにする。 $t_0=0.53$ $P=0.05$ の場

* Cochran-Cox's method による。

合, 基準 $t = 2.05$ $t_0 < t$ 検定の結果は両者の差は危険率 5% 以上でなければ認められず, C 群の第 1 回検定における虚偽答数も統計的には多いとはいえないことがわかる。しかし C 群の第 2 回検定の結果と B 群の第 2 回検定結果 (ともに教師事態) を比較してみると

$$\text{C 群 } \bar{X}_1 = 3.41 \quad \sigma_1 = 2.56 \quad N_1 = 29$$

$$\text{B 群 } \bar{X}_2 = 1.26 \quad \sigma_2 = 0.41 \quad N_2 = 47$$

$$U^2 \bar{X}_1 = 0.23 \quad U^2 \bar{X}_2 = 0.01$$

$$t_0 = 4.40 \quad P = 0.02 \text{ の場合 } \text{基準 } t = 2.57$$

$$\therefore P = 0.02 \text{ とすれば, } A_0 > t$$

となり危険率 2% 以下で有意差がみられる。他の場合検定を試みると危険率を 5% 以上にしなければ差はみとめられず C 群の第 2 回目のみが他の各群諸検査事態に比べて虚偽答数が多いということがいえる。

以上の結果の記述について, これをまとめてみると, もし虚偽答数の多少に心的機制の相違があるとすれば, 虚偽者生起率の点からも問題をはらんでいた C 群は, 虚偽答数の点からも本研究における焦点ということになる。つまり同群の第 2 回検査では, 虚偽者は少なくしかも 1 人あたりの虚偽答数が多いというわけであるから。一方虚偽者数も多く 1 人あたりの虚偽答数も多いという場合もみられる (A 群の第 2 回検定, この場合は教師事態の後の外来者事態である)。これは非常に興味ある現象であるが, ここでは資料の点から十分論ずることはむずかしい。ただ虚偽答数の多いものの中には, 日頃問題行為 (家出, 盗み, カンニング常習等) の多いものがみられ, あるいは問題児の対教師意識, 対外来者意識があ

らわれているとも思われる。C 群の場合には問題児のみが虚偽をしているといつていいくらいであるが, A 群の場合は普通のものも虚偽行為をしており, やはり虚偽生起, 虚偽答数の多少は, 被験者の質とともに先行経験をみて考察すべきものであろう。C 群の第 2 回検査では, 検査事態の要因が, 強い抑止的效果をもつていたと考えられたが, 被験者の日ごろの素行, 虚偽答数からすると抑止的效果は普通生徒には, 働いていたものの, 問題児にはそれほどでなかつたということになり, A 群では第 1 回の強い抑止が, 第 2 回では解消したものと推察されてくる。

2) 女子被験者の虚偽答数について

女子の場合まず気がつくことは, 各群とも第 1 回検査では, 学校差が大きいが, 第 2 回検査では学校差がなくなり, ほとんど同様な数値を示すことである。しかし C 群では第 1 回目の学校差も他の場合に比べて, 大きいわけではなく, また全般に少ないようである。学校差は, 第 1 回と第 2 回との対照でもみられる。つまりある学校では第 1 回より第 2 回が増加, ある学校では第 1 回の方が多いというようなことが, 各群にみられる。共通して増加をみているのは C 群のみである。

女子の C 群も男子と同様なことが考えられるのであるが, 結局男子の場合も女子の場合も検査者の虚偽者に対する影響は, 第 1 回, 第 2 回ともに教師事態という条件においてのみあきらかにみられるといえようが, それにしても男子では被験者側の条件も考えなければならず, ここでは問題を明らかにすることはできない。出題数い

Table 10 a 男子虚偽者

	A 群			B 群			C 群			D 群		
	第1回検査 虚偽者数	同一貫型 虚偽者数	右 50.00%	第1回検査 虚偽者数	同一貫型 虚偽者数	右 58.33%	第1回検査 虚偽者数	同一貫型 虚偽者数	右 12.50%	第1回検査 虚偽者数	同一貫型 虚偽者数	右 33.33%
仙 台	2名	1名	50.00%	12名	7名	58.33%	8名	1名	12.50%	15名	5名	33.33%
塩釜N	8	5	62.50	11	9	81.82	16	6	37.50	24	14	58.33
塩釜S	10	5	50.00	7	4	57.16	7	4	57.14	12	5	41.67
計	20	11	55.00	30	20	66.67	31	11	35.48	51	24	47.06

Table 10 b 女子虚偽者

	A 群			B 群			C 群			D 群		
	第1回検査 虚偽者数	同一貫型 虚偽者数	右 50.00%	第1回検査 虚偽者数	同一貫型 虚偽者数	右 100.00%	第1回検査 虚偽者数	同一貫型 虚偽者数	右 28.57%	第1回検査 虚偽者数	同一貫型 虚偽者数	右 25.00%
仙 台	2名	1名	50.00%	3名	3名	100.00%	7名	2名	28.57%	4名	1名	25.00%
塩釜N	10	9	90.00	7	5	71.45	11	3	27.27	10	6	60.00
塩釜S	14	6	42.84	6	3	50.00	6	1	16.67	8	6	75.00
計	26	16	61.54	16	11	68.75	24	6	25.00	22	13	59.99

かんということも考えられよう。

結果3：虚偽者の虚偽回数について

本実験では同一被験者に対して同一検査を2度くりかえして実施しているわけであり、①「第1回と第2回と一貫して虚偽をした者」 ②「第1回のみ虚偽をした者」 ③「第2回のみ虚偽をした者」の3類型に虚偽者を分類することができるわけである。このおのおのはそれぞれ心理的機制は異なつたものと考えられようが、ここでは一貫して虚偽をしたものを中心に結果を整理、考察してみることにする。

Table 10 a, b は第1回虚偽者数とその中で第2回にも虚偽をした者、つまり一貫型虚偽者の数および第1回検査の虚偽者数に対するその百分率を示したものである。

この結果から一応C群の場合に最も一貫型虚偽者（第1回、第2回ともに虚偽をした者をよぶ）が少ないようにみうけられる。これを統計的に検討を試みてみると、次式を用い被験者群間の差はかなり有意と思われる。

Table 11 a 男 子

	A 群		B 群		C 群		D 群		計Ti
	名	%	名	%	名	%	名	%	
一貫型虚偽者	11	55.00	20	66.67	11	35.48	24	47.06	66
第1回にのみ虚偽をなした者	9	45.00	10	33.33	20	64.52	27	52.94	66
計 Tj	20名		30		31		51		132

$$\chi^2 = N \left(\sum \frac{f_{ij}^2}{T_i T_j} - 1 \right) \text{ により}$$

$$\chi^2_0 = 5.00 \quad df = 3 \quad \chi^2_{0.05} = 4.64$$

$$\therefore P < 0.02$$

Table 11 b 女 子

	A 群		B 群		C 群		D 群		計Ti
	名	%	名	%	名	%	名	%	
一貫型虚偽者	16	61.54	11	68.75	6	25.00	13	59.99	46
第1回にのみ虚偽をなした者	10	38.46	5	31.25	18	75.00	9	40.01	42
計 Tj	26名		16		24		22		88

$$\chi^2_0 = 2.00 \quad df = 3 \quad \chi^2_{0.01} = 11.35$$

$$\therefore P < 0.01$$

すなわち男子においては4群間の差は危険率2%以下、女子では1%以下で有意であるわけであるが、その差はC群によつて生じていることはいうまでもないことである。つまりC群では、一貫型虚偽者が他の3群より少ないということがわかつたのであるが、この結果は虚

偽生起についてみたところと共通の現象であるように思われる。要するにC群の第1回、第2回ともに教師事態で、虚偽の生起に対して非常に抑止的要因の強いことが認められる。なおD群において、やや一貫型虚偽者のしめる率が低くなつてはいるが、D群は、第1回、第2回とも外来者事態であつて、いかに外来者であつても、同一検査者が、くりかえし再度検査を行なう場合には、被験者の検査に対する態度がかわつてくるものであろうが、正直性検査では虚偽をおこさせないような抑止的なものとなると考えられる。つまり検査には検査者の影響性ととも、被験者の体験が要因として力をもっていることをここでも示しているということになる。

以上実験条件にしたがつて、研究問題に対する有効な資料と考えられるものについて、結果を述べかつ論じてきた。資料のとり方や考察については異論もあろうし、再考を要すべきものもあるが、その検討は後日とし、ここではこれだけでとどめることにする。

IV 討 論

従来、要求の強さで説明される虚偽行動を測定しようとする「正直性検査」について、検査者を①教師、②外来者の2者にし、中学校1年の男女生徒に実施すると、教師実施事態では外来者実施事態より虚偽行為の生起はあきらかに少ない。この現象は、検査の応答に検査実施者の影響がみられるとする他の諸研究結果と同様であるが、本研究においては検査者の影響性は、検査者に対する被験者の好嫌や、検査者の個人的条件であるよりは、検査者の地位、その他は被験者との人間関係であると考えられる。

しかもまた、常に教師事態では虚偽の生起は少ないかという決してそうではない。第1回検査を外来者が実施している場合に第2回を教師が実施すると、虚偽は少ないどころか、外来者と同様な生起率を示してくる。これは、非常に興味をひくところのものであり、検査者の影響の先行経験による変化といえるものであろう。これについては、さらに本実験におけるC群とD群の場合を参照すると、より詳細な結果を得ることができる。すなわちC群は第1回、第2回ともに教師実施事態であり、D群ではともに外来者実施事態であるが、両群とも第2回検査では虚偽者は少なくなつてはいる。同じ第2回が教師実施事態であつても第2回検査の検査いかんで虚偽の生起は異なるのであり、同様に第2回に外来者が実施した場合にも、第2回の検査者が、教師によつて実施されるか、外来者によつて実施されるかで、虚偽は多く

もなり少なくともなるのである。すなわち、先行経験の内容とくりかえしとは、ともに検査者の影響を変えると考えられるのである。

虚偽答数からすれば、上記のことはあまり判然としたかたちであられないが、C群の第2回検査で、多少虚偽答が多くなつており、この場合の少数の虚偽者の虚偽行為の質的面を説明していると同時に、やはり前記の考察を裏づけているものと思われる。しかし虚偽答数の多少についての明確な理解は本検査では得られないので、今後の研究が必要である。なお虚偽者から「第1回検査と第2回検査の両方に虚偽をしたもの」——一貫型虚偽者——を選び出し、各群についてみると、C群において最も少なく、ついでD群であり、この結果は虚偽者数から考察したところを、さらに強調するものと考えられる。すなわちこの場合は検査者の抑止的効果と検査のくりかえしについて説明するものであり、虚偽者の生起を抑止的効果と検査のくりかえしについて説明するものであり、虚偽者の生起を抑止する影響性を分析し、単に虚偽者数が少なくなることを示すのみならず、その虚偽回数から虚偽者の質的面を示しているものであるといえよう。本研究は、提出した問題に対して、方法論上にも反省を必要とし、十分な結論を得ているものではないが、検査の結果に対して、検査実施者と被験者の心理関係として、実施者の被験者に対する位置が考慮されなければならないことと、その実施者の影響性は、被験者の先行経験内容と検査頻度によつて、変容するということを実証していると考えられる。

V 今後の問題

いわゆる検査事態の検査実施における問題は、実際に検査を試みたことのある人ならば、一度は感じたことがあると思われる。今までの諸研究は、いろいろの立場からこの問題の解明を試みているわけであり、本研究もその一端を問題としているのである。本研究では、検査者のもつ影響性も、被験者の検査についての先行経験によつて変容することがあることを示したのであるが、その場合に抑止的効果も、先行経験いかなんではまつたく、抑止的でなくなることもあり、また、その逆もあることも推察させられたのである。一般に検査結果におよぼす抑止効果については、あまり研究はされておらず、本研究も十分な知見を得ていないが、得られた結果から一応次のような新しい問題がひきだされよう。

① 教師のもつ被験者への影響性は、いかなる種類の検査で抑止的であり、いかなる検査で抑止的でないか。

② 教師のもつ影響性の抑止的である場合の検査くり

かえしによる変化はいかなるものであるか。

③に Gibby らの研究にみられるように、検査者の影響が、検査の応答のいかなる部分にいかなる形で作用するのか。

これらは非常に局部的問題でもあり、その価値的見解は、いろいろ異なるところもあろうし、多々論すべきものであろう。また研究方法自体の問題も十分考慮されるべきであつて、検査事態に関する問題の、今後に期待されるべきものが多いことは、等しく認められるところである。

文 献

- (1) Bernstein, L.: The examiner as an inhibiting factor in clinical testing. *J. Consult. Psychol.*, 1956, Vol. 20, No. 4, 287—290.
- (2) Cole, D.: Communication and rapport in clinical testing. *J. Consult. Psychol.*, 1953, Vol. 17, No. 2, 132—134.
- (3) Diehl, C. F.: Effect of voice quality on communication. *J. Speech and Hearing Disorders*, 1956, Vol. 21, No. 2, 233—237.
- (4) Diamond, M. D.: The ability of Schizophrenics to modify responses in an interpersonal situation. *J. Consult. Psychol.*, 1956, Vol. 20, No. 6, 441—444.
- (5) Gibby, R. G.: Examiner influence on the Rorschach inquiry. *J. Consult. Psychol.*, 1952, Vol. 16, No. 6, 445—449.
- (6) Gibby, R. G. & Stotsky, B. A.: The relation of Rorschach free association to inquiry. *J. Consult. Psychol.*, 1953, Vol. 17, No. 5, 359—363.
- (7) Gibby, R. G.; Miller, R. D. & Walker, L. E.: The examiner's influence on the Rorschach protocol. *J. Consult. Psychol.*, 1953, Vol. 17, No. 6, 425—428.
- (8) Gibby, R. G.; Stotsky, B. A.; Harrington, R. L. & Thomas, R. W.: Rorschach determinant shift among Hallucinatory and Delusional patients. *J. Consult. Psychol.*, 1955, Vol. 19, No. 7, 44—46.
- (9) Sacks, E. L.: Intelligence scores as a function of experimentally established social relationship between child and examiner. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1952, Vol. 47, No. 3, 354—358.
- (10) 佐藤健: 中学校生徒の虚偽行為に関する実験的研

- 究. 児童心理と精神衛生, 4巻1号, 昭28, 6—14.
- (11) 佐藤健：中学校生徒の価値観に関する調査. 東北教育学会 第10回大会研究口頭発表論文, 昭29.
- (12) 塚田毅：自己診断におよぼす態度の影響について. 千輪先生還暦記念論文集, 東京大学, 昭27, 207—210.
- (13) 続有恒：質問紙調査法. 同学社, 昭29, 121—153.
- (14) 続, 秦, 久世：実験者被験者間の Rapport についての一研究. 心理学研究, 27巻, 1号, 昭31, 22—28.
- (15) 秦, 続, 久世, 江見：作業成績におよぼす実験者—被験者の影響 (I) ——実験者の印象と知能検査成績——心理学研究, 29巻, 2号, 95—99.
- (16) 続, 久世, 秦：作業成績におよぼす実験者—被験者の影響 (II) ——実験者との親近性と知能検査成績——心理学研究, 29巻, 2号, 100—104.
- (17) Thibaut, J. W. & Riecken, H. W. : Authoritarianism, status and the communication of aggression. *Human Relation*, 1955, Vol. 8, No. 2, 95—120.
- (18) Wickes, Jr. T. A. : Examiner influence in a testing situation. *J. Consult. Psychol.*, 1956, Vo. 20, No. 1, 23—26.

(1958年8月4日原稿受付)